

# 源氏物語

松風

紫式部

青空文庫



あぢきなき松の風かな泣けばなき小琴  
をとればおなじ音を弾く  
(晶子)

東の院が美々しく落成したので、はなちるぎと花散里といわれていた夫人を源氏は移らせた。西の対から渡わた殿へかけてをその居所に取つて、事務の扱けいい所、家司の詰め所なども備わつた、源氏の夫人の一人としての体面を損じないような住居すまいにしてあつた。東の対には明石あかしの人を置こうと源氏はかねてから思つていた。北の対をばことに広く立てて、かりにも源氏が愛人と見て、将来のことまでも約束してある人たちのすべてをそこへ集めて住ませようという考えをもつていた源氏は、そこを幾つにも仕切つて作らせた点で北の対は最もおもしろい建物になつた。中央の寝しんでん殿はだれの住居すまいにも使わせずに、時々源氏が来て休息をしたり、客を招いたりする座敷にしておいた。

明石へは始終手紙が送られた。このごろは上京を促すことばかりを言う源氏であつた。女はまだ躑ちゆうちよ躑ちゆうちよをしてるのである。わが身の上のかいなさをよく知つていて、自分なごとは比べられぬ都の貴女きじよたちでさえ捨てられるのでもなく、また冷淡でなくもないよう

な扱いを受けて、源氏のために物思いを多く作るといふ噂うわさを聞くのであるから、どれだけ愛されているという自信があつてその中へ出て行かれよう、姫君の生母の貧弱さを人目にさらすだけで、たまさかの訪問を待つにすぎない京の暮らしを考えるほど不安ことはなはんもんいと煩悶はんもんをしながらも明石は、そうかといつて姫君をこの田舎いなかに置いて、世間から源氏の子として取り扱われぬような不幸な目にあわせることも非常に哀れなことであると思つて、出京は断然しないとも源氏へ答えることはできなかつた。両親も娘の煩悶するのをもつとも思われて歎たんそく息ばかりしていた。入道夫人の祖父の中なかつかさきょう務卿親王が昔持つておいでになつた別荘が嵯峨さかの大井川のそばにあつて、宮家の相続者にしかとした人がないままに別荘などもそのままに荒廢させてあるのを思い出して、親王の時からずっと預かり人のようになつている男を明石へ呼んで相談をした。

「私はもう京の生活を二度とすまいという決心で田舎へ引きこもつたのだが、子供になつてみるとそうはいかないもので、その人たちのためにまた一軒京に家を持つ必要ができたのだが、こうした静かな所ところにいて、にわかにわかに京の町中の家へはいつて気も落ち着くものではないと思われるので、古い別荘のほうへでもやろうかと思う。そちらで今まで使つてゐるだけの建物は君のほうへあげてもいいから、そのほかの所を修繕して、とにかく人が住め

るだけの別荘にこしらえ上げてもらいたいと思うのだが」

と入道が言った。

「もう長い間持ち主がおいでにならない別荘になって、ひどく荒れたものですから、私たちは下屋しもやのほうに住んでおりますが、しかし今年の春ごろから内大臣さんが近くへ御堂みどうの普請をお始めになりました、あすこはもう人がたくさん来る所になっておりますよ、たいした御堂ができるのですから、工事に使われている人数だけでもどんなに大きいかしれません。静かなお住居すまいがよろしいのならあすこはだめかもしれませぬ」

「いや、それは構わないのだ。というのは内大臣家にも関係のあることでそこへ行こうとしているのだからね。家の中の設備などは追いついてこちからさせるが、まず急いで大体の修繕のほうをさせてくれ」

と入道が言う。

「私の所有ではありませんが、持っていていらつしやる方もなかつたものですから、一軒家のような所を長く私が守つて来たのです。別荘についた田地なども荒れる一方でしたから、お亡なくなりになりました民部大輔みんぶだいゆうさんをお願いして、譲っていただくことにしましてそれだけの金は納めたのでした」

預かり人は自身の物のようにしている田地などを回収されなしかと危うがって、権利を主張しておかねばというように、鬚ひげむしやな醜い顔の鼻だけを赤くしながら顎あごを上げて弁じ立てる。

「私のほうでは田地などいらぬ。これまでどおり君は思っておればいい。別荘その他の証券は私のほうにあるが、もう世捨て人になってしまつてからは、財産の権利も義務も忘れてしまつて、留守居料るすいも払つてあげなかつたが、そのうち精算してあげるよ」

こんな話も相手は、入道が源氏に關係のあることをにおわしたことで気味悪く思つて、私慾しよくをそれ以上たくましくはしかねていた。それからのち、入道家から金を多く受け取つて大井の山莊は修繕されていった。そんなことは源氏の想像しないことであつたから、上京をしたがらない理由は何にあるかと怪しんでは、姫君がそのまま田舎に育てられていくことによつて、のちの歴史にも不名誉な話が残るであろうと源氏は歎息たんそくされるのであつたが、大井の山莊ができ上がつてから、はじめて昔の母の祖父の山莊のあつたことを思い出して、そこを家にして上京するつもりであると明石から知らせて来た。東の院へ迎えて住ませようとしたことに同意しなかつたのは、そんな考えであつたのかと源氏は合点した。聡明そうめいなしかただとも思つたのであつた。惟光これみつが源氏の隠し事ことに關係しないことはなく

て、明石の上京の件についても源氏はこの人にまず打ち明けて、さっそく大井へ山荘を見にやり、源氏のほうで用意しておくことは皆させた。

「ながめのよい所でございます、やはりまた海岸のような気のされる所もございます」と惟光は報告した。そうした山荘の風雅な女主人になる資格のある人であると源氏は思っていた。

源氏の作っている御堂は大覚寺の南にあたる所で、滝殿たきどのなどの美術的なことは大覚寺にも劣らない。明石の山荘は川に面した所で、大木の松の多い中へ素朴すぼくに寢殿の建てられであるのも、山荘らしい寂しい趣が出ているように見えた。源氏は内部の設備までも自身のほうでさせておこうとしていた。親しい人たちをもまたひそかに明石へ迎えに立たせた。免れがたい因縁に引かれていよいよそこを去る時になったのであると思うと、女の心は馴染なじみ深い明石の浦に名残なごりが惜しまれた。父の入道を一人ぼっちで残すことも苦痛であった。なぜ自分だけはこんな悲しみをしなければならないのであろうと、朗らかな運命を持つ人がうらやましかつた。両親も源氏に迎えられて娘が出京するというようなことは長い間寝てもさめても願っていたことで、それが実現される喜びはあっても、その日を限りに娘たちと別れて孤独になる将来を考えると堪えがたく悲しくて、夜も昼も物思いに入道は呆ぼうと

していた。言うことはいつも同じことで、

「そして私は姫君の顔を見ないでいるのだね」

そればかりである。夫人の心も非常に悲しかった。これまでもすでに同じ家には住まず別居の形になつていたのであるから、明石が上京したあとに自分だけが残る必要も認めてはいないものの、地方にいる間だけの仮の夫婦の中でも月日が重なつて馴染なじみの深くなつた人たちは別れがたいものに違いないのであるから、まして夫人にとっては頑固がんこな我意の強い良人おととではあつたが、明石に作つた家で終わる命を予想して、信頼して来た妻なのであるからにわかになつて京へ行つてしまうことは心細かつた。光明を見失つた人になつて田舎いなかの生活をしていた若い女房などは、蘇生そせいのできたほどにうれしいのであるが、美しい明石の浦の風景に接する日のまたないであろうことを思うことで心のめいることもあつた。これは秋のことであつたからことに物事が身に沁しんで思われた。出立の日の夜明けに、涼しい秋風が吹いていて、虫の声もする時、明石の君は海のほうをながめていた。入道は後夜ごやに起きたままできて、鼻をすすりながら仏前の勤めをしていた。門出の日は縁起を祝つて、不吉なことはだれもいっさい避けようとしてゐるが、父も娘も忍ぶことができずに泣いていた。小さい姫君は非常に美しく、夜光の珠たまと思われる麗質の備わつてゐるのを、これ



までどれほど入道が愛したかしのれない。祖父の愛によく馴染んでいる姫君を入道は見て、「僧そうぎよう形ぎようの私が姫君のそばにすることは遠慮すべきだとこれまでも思いながら、片時だつてお顔を見ねばいられなかつた私は、これから先どうするつもりだろう」と泣く。

「行くさきをはるかに祈る別れ路ぢにたへぬは老いの涙なりけり

不謹慎だ私は」

と言つて、落ちてくる涙を拭ぬぐい隠かくそうとした。尼君が、京時代の左近中将おつとの良人に、

「もろともに都は出いできこのたびや一人野中の道に惑はん」

と言つて泣くのも同情されることであつた。信頼をし合つて過ぎた年月を思うと、どうなるかわからぬ娘の愛人の心を頼みにして、見捨てた京へ帰ることが尼君をはかなくさせるのであつた。明石が、

「いきてまた逢ひ見んことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まん

送つてだけでもくださいませんか」

と父に頼んだが、それは事情が許さないことであると入道は言いながらも途中が気づかわれるふうが見えた。

「私は出世することなどを思い切ろうとしていたのだが、いよいよその気になって地方官になったのは、ただあなたに物質的にだけでも十分尽くしてやりたいということからだった。それから地方官の仕事も私に適したものでないことをいろんな形で教えられたから、これをやめて地方官の落伍者らくごの一人で、京で軽蔑けいべつされる人間にこの上なつては親の名譽を恥ずかしめることだと悲しくて出家したがね、京を出たのが世の中を捨てる門出だったと、世間からも私は思われていて、よく潔くそれを実行したと私自身にも満足感まんぞくはあったが、あなたが一人前の少女になつてきたのを見ると、どうしてこんな珠玉たまごを泥土でいどに置くような残酷なことを自分にしたかと私の心はまた暗くなつてきた。それから仏と神を頼んで、この人までが私の不運に引かれて一地方人となつてしまふようなことがないようと

願った。思いがけず源氏の君を婿に見る日が来たのであるが、われわれには身分のひけ目があった、よいことにも悲しみが常に添っていた。しかし姫君がお生まれになったことで私もだいたい自信ができてきた。姫君はこんな土地でお育ちになつてはならない高い宿命を持つ方に違いないのだから、お別れすることがどんなに悲しくても私はあきらめる。何事ももうとくにあきらめた私は僧じやないか。姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時の間私に祖父と孫の愛を作つて見せてくださったのだ。天に生まれる人も一度は三途の川まで行くということにあたることだとそれを思つて私はこれで長いお別れをする。私が死んだと聞いても仏事などはしてくる必要はない。死に別れた悲しみもしないでおおきなさい」

と入道は断言したのであるが、また、

「私は煙になる前の夕べまで姫君のことを六時の勤行ごんぎょうに混ぜて祈ることだろう。恩愛が捨てられないで」

と悲しそうに言うのであつた。車の数の多くなることも人目を引くことであるし、二度に分けて立たせることも面倒めんどろなことであるといつて、迎えに来た人たちもまた非常に目だつことを恐れるふうであつたから、船を用いてそつと明石親子は立つことになつた。

午前八時に船が出た。昔の人も身にしむものに見た明石の浦の朝霧に船の隔たつて行くのを見る入道の心は、仏弟子ぶつでしの超越した境地に引きもどされそうもなかった。ただ呆然ぼうぜんとしていた。

長い年月を経て都へ帰ろうとする尼君の心もまた悲しかった。

かの岸に心寄りにし海人船あまぶねのそむきし方に漕ぎ帰るかな

と言つて尼君は泣いていた。明石は、

いくかへり行きかふ秋を過ごしつつ浮き木に乗りてわれ帰るらん

と言つていた。追い風であつて、予定どおりに一行の人は京へはいることができた。車に移つてから人目を引かぬ用心をしながら大井の山荘へ行つたのである。

山荘は風流にできていて、大井川が明石でながめた海のように前を流れていたから、住す居まいの変わった気もそれほどしなかつた。明石の生活がなお近い続きのように思われて、悲

しくなることが多かった。増築した廊なども趣があつて園内に引いた水の流れも美しかった。欠点もあるが住みついたならきつとよくなるであろうと明石の人々は思った。源氏は親しい家司けいしに命じて到着の日の一行の饗きやう応おうをさせたのであつた。自身たすで訪ねて行くことは、機会を作ろう作ろうとしながらもおくれるばかりであつた。源氏に近い京へ来ながら物思いばかりがされて、女は明石あかしの家も恋しかつたし、つれづれでもあつて、源氏の形見の琴きんの絃いとを鳴らしてみた。非常に悲しい氣のする日であつたから、人の来ぬ座敷で明石がそれを少し弾ひいてみると、松風の音が荒々しく合奏をしかけてきた。横になつていた尼君が起き上がつて言つた。

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

女むすめが言つた。

ふるさつに見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰たれか分くらん

こんなふうにはかながつて暮らしていた数日のうちに、以前にもまして逢あいがたい苦しさを切に感じる源氏は、人目もはばからずに大井へ出かけることにした。夫人にはまだ明石の上京したことは言つてなかつたから、ほかから耳にはいっては気まずいことになると思つて、源氏は女房を使いにして言わせた。

「桂かつらに私が行つて指図さしずをしてやらねばならないことがあるのですが、それをそのままにして長くなつていきます。それに京へ来たら訪ねようという約束のしてある人もその近くへ上つて来ているのですから、濟まない気がしますから、そこへも行つてやります。嵯峨野さかののの御堂みどうに何もそろつていない所にいらつしやる仏様へも御挨拶あいさつに寄りますから二、三日は歸らないでしょう」

夫人は桂の院という別荘の新築されつつあることを聞いたが、そこへ明石の人を迎えたのであつたかと気づくとうれしいことは思えなかつた。

「斧おのの柄を新しくなさらなければ（仙せん人の碁を見物している間に、時がたつて気がついてみるとその樵夫きりの持つていた斧の柄は朽ちていたという話）ならないほどの時間はさぞ待ち遠いことでしょう」

不愉快そうなこんな夫人の返事が源氏に伝えられた。

「また意外なことをお言いになる。私はもうすっかり昔の私でなくなつたと世間でも言うではありませんか」

などと一言させて夫人の機嫌きげんを直させようとするうちに昼になつた。

微行しのびで、しかも前駆には親しい者だけを選んで源氏は大井へ来た。夕方前である。いつも狩かりぎぬ衣姿ぬいをしていた明石時代でさえも美しい源氏であつたのが、恋人に逢うがために引き繕のうしつた直衣姿はまばゆいほどまたりっぱであつた。女のした長い愁うれいもこれに慰められた。源氏は今さらのようにこの人に深い愛を覚えながら、二人の中に生まれた子供を見てまた感動した。今まで見ずにいたことさえも取り返されない損失のように思われる。左大臣家で生まれた子の美貌びぼうを世人はたたえるが、それは権勢に目がくらんだ批評である。これこそ真の美人になる要素の備わつた子供であると源氏は思った。無邪気な笑顔えがおの愛あい嬌うの多いのを源氏は非常にかわいく思った。乳母めのとも明石へ立つて行つたころの衰えた顔はなくなつて美しい女になつている。今日までのことをいろいろとなつかしいふうに話すのを聞いていた源氏は、塩焼き小屋に近い田舎いなかの生活をしいてさせられてきたのに同情するといふようなことを言つた。

「ここだつてまだずいぶんと遠すぎる。したがつて私が始終は来られないことになるから、

やはり私があなたのために用意した所へお移りなさい」

と源氏は明石に言うのであったが、

「こんなふうには田舎者であることが少し直りましてから」

と女の言うのも道理であった。源氏はいろいろに明石の心をいたわったり、将来を堅く誓ったりしてその夜は明けた。なお修繕を加える必要のある所を、源氏はもとの預かり人や新たに任命した家職の者に命じていた。源氏が桂の院へ来るといふ報せしらがあつたために、この近くの領地の人たちの集まつて来たのは皆そこから明石の家のほうへ来た。そうした人たちに庭の植え込みの草木を直させたりなどした。

「流れの中にあつた立たて石が皆倒れて、ほかの石といっしよに紛れてしまつたらしいが、そんな物を復旧させたり、よく直させたりすればいぶんおもしろくなる庭だと思われが、しかしそれは骨を折るだけかえつてあとでいけないことになる。そこに永久いるものでもないから、いつか立つて行つてしまふ時に心が残つて、どんなに私は苦しかつたらう、帰る時に」

源氏はまた昔を言い出して、泣きもし、笑いもして語るのであった。こうした打ち解けた様子の見える時に源氏はいつそう美しいのであった。のぞいて見ていた尼君は老いも忘



れ、物思いも跡かたなくなつてしまふ気がして微笑ほほえんでいた。東の渡わた殿の下をくぐつて来る流れの筋を仕変えたりする指図さしずに、源氏は袿うちぎを引き掛けたくつろぎ姿でいるのがまた尼君にはうれしいのであつた。仏の闕伽あかの具などが縁に置かれてあるのを見て、源氏はその中が尼君の部屋であることに気がついた。

「尼君はこちらにおいてになりますか。だらしない姿をしています」

と言つて、源氏は直衣のうしを取り寄せて着かえた。几帳きちょうの前にすわつて、

「子供がよい子に育ちましたのは、あなたの祈りを仏様がいれてくださったせいだろうとありがたいと思います。俗をお離れになつた清い御生活から、私たちのためにまた世の中へ歸つて来てくださつたことを感謝しています。明石ではまた一人でお残りになつて、どんなにこちらのことを想像して心配していただくさるだろうと済まなく私は思っています」  
となつかしいふうに話した。

「一度捨てました世の中へ歸つてまいつて苦しんでおります心も、お察しくございましたので、命の長さもうれしく存ぜられます」

尼君は泣きながらまた、

「荒磯あらいそかげに心苦しく存じました二葉ふたばの松もいよいよ頼もしい未来が思われます日に到

達いたしましたが、御生母がわれわれ風情ふぜいの娘でございますことが、御幸福さわの障りさわにならぬかと苦勞くろうにしております」

などという様子に品のよさの見える婦人であつたから、源氏はこの山莊さんじやうの昔あきの主あるじの親王のことなどを話題にして語つた。直された流れの水はこの話に言葉を入れたいように、前よりも高い音を立てていた。

住み馴なれし人はかへりてたどれども清水しみづぞ宿あるじの主人あるじがほなる

歌であるともなくこう言う様子に、源氏は風雅を解する老女であると思つた。

「いさらゐははやくのことも忘れじをもとの主人あるじや面おも変おもはりせる

悲しいものですね」

と歎たん息そくして立つて行く源氏の美しいとりなしにも尼君は打たれて茫ぼうとなつていた。

源氏は御堂みどうへ行つて毎月十四、五日と三十日に行なう普賢ふげん講こう、阿弥あみ陀だ、釈迦しゃかの念仏ねんぶつの

三昧さんまいのほかにも日を決めてする法会ほうえのことを僧たちに命じたりした。堂の裝飾や仏具の製作などのことも御堂の人々へ指図さしずしてから、月明の路みちを川沿いの山荘へ歸つて来た。

明石の別離の夜のことが源氏の胸によりがえつて感傷的な気分になつてゐる時に女はその夜の形見の琴を差し出した。弾ひきたい欲求もあつて源氏は琴を弾き始めた。まだ絃いとの音が變わつていなかった。その夜が今であるようにも思われる。

契りしに變はらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや

と云うと、女が、

變はらじと契りしことを頼みにて松の響ねに音を添へしかな

と云う。こんなことが不つりあいに見えないのは女からいえば過分なことであつた。明石時代よりも女の美に光彩が加わつていた。源氏は永久に離れがたい人になつたと明石を思つてゐる。姫君の顔からもまた目は離せなかつた。日蔭ひかげの子として成長していくのが、

堪えられないほど源氏はかわいそうで、これを二条の院へ引き取ってできる限りにかしずいてやることにすれば、成長後の肩身の狭さも救われることになるであろうとは源氏の心に思われることであつたが、また引き放される明石の心が哀れに思われて口へそのことは出ずにただ涙ぐんで姫君の顔を見ていた。子心にはじめは少し恥ずかしがつていたが、今はもうよく馴なれてきて、ものを言つて、笑つたりもしてみせた。甘えて近づいて来る顔がまたいつそう美しくてかわいいのである。源氏に抱かれている姫君はすでに類のない幸運に恵まれた人と見えた。

三日目は京へ帰ることになつていたので、源氏は朝もおそく起きて、ここから直接歸つて行くつもりでいたが、桂の院のほうへ高官がたくさん集まつて来ていて、この山荘へも殿上役人がおおぜいで迎えに来た。源氏は装束をして、

「きまりの悪いことになつたものだね、あなたがたに見られてよい家うちでもないのに」

と言いながらいつしよに出ようとしたが、心苦しく女を思つて、さりげなく紛らして立ち止まつた戸口へ、乳母めのとは姫君を抱いて出て来た。源氏はかわいい様子で子供の頭を撫なでながら、

「見ないでいることは堪えられない気のするのにもわかな愛情すぎるね。どうすればいい

だろう、遠いじゃないか、ここは」

と源氏が言うのと、

「遠い田舎の幾年よりも、こちらへ参つてたまさかしかお迎えできないようなことになりましては、だれも皆苦しゅうございましょう」

など乳母は言つた。姫君が手を前へ伸ばして、立つている源氏のほうへ行こうとするのを見て、源氏は膝ひざをかがめてしまった。

「もの思いから解放される日のない私なのだね、しばらくでも別れているのは苦しい。奥さんはどこにいるの、なぜここへ来て別れを惜しんでくれないのだろう、せめて人心地ひとこころちが出てくるかもしれないのに」

と言うと、乳母は笑いながら明石の所へ行つてそのとおりを言つた。女は逢あつた喜びが二日で尽きて、別れの時の来た悲しみに心を乱していて、呼ばれてもすぐに出ようとしないのを源氏は心のうちであまりにも貴女きじよぶるのではないかと思つていた。女房たちからも勧められて、明石あかしはやつと膝行いざつて出て、そして姿は見せないように几帳きちようの蔭かげへはいるようにしている様子に気品けだかが見えて、しかも柔らかい美しさのあるこの人は内親王と言つてもよいほどに気高く見えるのである。源氏は几帳たの垂れ絹を横へ引いてまたこまやかに

ささやいた。いよいよ出かける時に源氏が一度振り返って見ると、冷静にしていた明石も、この時は顔を出して見送っていた。源氏の美は今が盛りであると思われた。以前は瘦せて背丈が高いように見えたが、今はちよいどいいほどになっていた。これでこそ貫目のある好男子になられたというものであると女たちがながめていて、指貫の裾からも愛嬌はこぼれ出るように思った。解官されて源氏について漂泊えた蔵人もまた旧の地位に復つて、鞍負尉になつた上に今年は五位も得ていたが、この好青年官人が源氏の太刀を取りに戸口へ来た時に、御簾の中に明石のいるのを察して挨拶をした。

「以前の御厚情を忘れておりませんが、失礼かと存じますし、浦風に似た気のいたしました今暁の山風にも、御挨拶を取り次いでいただく便もございませんでしたから」

「山に取り巻かれておりましては、海への頼りない住居と変わりもなく、松も昔の（友ならなくに）と思つて寂しがっておりますが、昔の方がお供の中においてになつて力強く思います」

などと明石は言つた。すばらしいものにこの人はなつたものだ、自分だつて恋人にしたと思つたこともある女ではないかなどと思つて、驚異を覚えながらも蔵人は、  
「また別の機会に」

と言つて男らしく肩を振つて行つた。りっぱな風采ふうさいの源氏が静かに歩を運ぶかたわらで先払いの声が高く立てられた。源氏は車へ頭とうのちゆうじよう中將ひようえのかみ、兵衛督ひやうえのかみなどを陪乗させた。「つまらない隠れ家を発見されたことはどうも残念だ」

源氏は車中でしきりにこう言つていた。

「昨夜はよい月でございましたから、嵯峨さがのお供のできませんでしたことが口惜くちおしくてなりません、今朝けさは霧の濃い中をやつて参つたのでございます。嵐あらしやま山の紅葉もみぢはまだ早うございました。今は秋草の盛りでございますね。某朝臣ぼうあそんはあすこで小鷹狩こたかがりを始めただ今いっしょに参れませんでした、どういたしますか」

などと若い人は言つた。

「今日はもう一日桂かつらの院で遊ぶことにしよう」

と源氏は言つて、車をそのほうへやつた。桂の別荘のほうではにわかにかの饗きやう応おうの仕度したくが始められて、鵜飼ういなども呼ばれたのであるがその人夫たちの高いわからぬ会話が聞こえてくることに海岸にいたころの漁夫の声が思い出される源氏であつた。大井の野に残つた殿上役人が、しるしだけの小鳥を萩はぎの枝などへつけてあとを追つて来た。杯がたびたび巡つたあとで川べの逍遙しょうようを危あやぶまれながら源氏は桂の院で遊び暮らした。月がは

なやかに上つてきたころから音楽の合奏が始まった。絃樂のほうは琵琶、和琴などだけで笛の上手が皆選ばれて伴奏をした曲は秋にしっくり合ったもので、感じのよいこの小合奏に川風が吹き混じっておもしろかった。月が高く上つたころ、清澄な世界がここに現出したような今夜の桂の院へ、殿上人がまた四、五人連れで来た。殿上に伺候していたのであるが、音楽の遊びがあつて、帝が、

「今日は六日の謹慎日が済んだ日であるから、きつと源氏の大<sup>おとど</sup>臣は来るはずであるのだ、どうしたか」

と仰せられた時に、嵯峨へ行っていることが奏されて、それで下された一人のお使いと同行者なのである。

「月のすむ川の遠<sup>をち</sup>なる里なれば桂の影はのどけかるらん

うらやましいことだ」

これが蔵人弁であるお使いが源氏に伝えたお言葉である。源氏はかしこまって承つた。清涼殿での音楽よりも、場所のおもしろさの多く加わったこの管絃樂に新来の人々



は興味を覚えた。また杯が多く巡った。ここには纏頭てんとうにする物が備えてなかったために、源氏は大井の山荘のほうへ、

「たいそうでない纏頭の品があれば」

と言つてやつた。明石あかしは手もとにあつた品を取りそろえて持たせて来た。衣服箱二荷であつた。お使いの弁は早く帰るので、さつそく女装束が纏頭に出された。

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山ざと

というのが源氏の勅答の歌であつた。帝の行幸を待ち奉る意があるのであろう。「中に生おひたる」(久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる)と源氏は古歌を口ずさんだ。源氏がまた躬恒みつねが「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵こよひはとこころがらかも」と不思議がつた歌のことを言い出すと、源氏の以前のことを思つて泣く人も出てきた。皆酔つてもいるからである。

めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

これは源氏の作である。

浮き雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき

頭とうのちゆうじょう中將ちゆうじょうである。右大弁は老人であつて、故院の御代みよにも睦まじくお召し使むついになつた人であるが、その人の作、

雲の上の住みかを捨てて夜半よはの月いづれの谷に影隠しけん

なおいろいろな人の作もあつたが省略する。歌が出てからは、人々は感情のあふれてくるままに、こうした人間の愛し合う世界を千年も続けて見ていききたい気を起こしたが、二条の院を出て四日目の朝になつた源氏は、今日はぜひ帰らねばならぬと急いだ。一行にいろいろな物をついだ供の人が加わつた列は、霧の間を行くのが秋草の園のようで美しかった。近衛府このえふの有名な芸人の舎人とねりで、よく何かの時には源氏について来る男に今朝も「そ

の駒こま」などを歌わせたが、源氏をはじめ高官などの脱いで与える衣服の数が多くてそこにもまた秋の野の錦にしきの翻る趣があつた。大騒ぎにはしやぎにはしやいで桂の院を人々の引き上げて行く物音を大井の山荘でははるかに聞いて寂しく思つた。言つてもせずことごとに歸つて行くことを源氏は心苦しく思つた。

二条の院に着いた源氏はしばらく休息をしながら夫人に嵯峨さかの話をした。

「あなたと約束した日が過ぎたから私は苦しみましたよ。風流男どもがあとを追つて来ね、あまり留めるものだからそれに引かれていたのですよ。疲れてしまつた」

と言つて源氏は寢室へはいつた。夫人が氣むずかしいふうになつてゐるのも氣づかないように源氏は扱つていた。

「比較にならない人を競争者でもあるように考えたりなどすることもよくないことですよ。あなたは自分は自分であると思ひ上がつていればいいのですよ」

と源氏は教えていた。日暮れ前に参内しようとして出かけぎわに、源氏は隠すように紙を持つて手紙を書いているのは大井へやるものらしかつた。こまごまと書かれてゐる様子がかがわれるのであつた。侍を呼んで小声でささやきながら手紙を渡す源氏を女房たちは憎く思つた。その晩は御所で宿直とこのいもするはずであるが、夫人の機嫌きげんの直つていなかつた

ことを思つて、夜はふけていたが源氏は夫人をなだめるつもりで帰つて来ると、大井の返事を使いが持つて来た。隠すこともできずに源氏は夫人のそばでそれを読んだ。夫人を不愉快にするようなことも書いてなかつたので、

「これを破つてあなたの手で捨ててください。困るからね、こんな物が散らばつていたりすることはもう私に似合つたことではないのだからね」

と夫人のほうへそれを出した源氏は、脇息きょうそくによりかかりながら、心のうちでは大井の姫君が恋しくて、灯ひをながめて、ものも言わずにじつとしていた。手紙はひろがつたままであるが、女王にょおうが見ようとしもないのを見て、

「見ないようにして、目のどこかでああなたは見ているじゃありませんか」

と笑いながら夫人に言いかけた源氏の顔にはこぼれるような愛あい嬌きょうがあつた。夫人のそばへ寄つて、

「ほんとうはね、かわいい子を見て来たのですよ。そんな人を見るとやはり前生の縁の浅くないということが思われたのですがね、とにかく子供のことはどうすればいいのだろう。公然の子供として扱うことも世間へ恥はづかずかしいことだし、私はそれで煩悶はんもんしています。いっしょにあなたも心配してください。どうしよう、あなたが育ててみませんか、三つに

なっているのです。無邪気なかわいい顔をしているものだから、どうも捨てておけない気がします。小さいうちにあなたの子にしてもらえば、子供の将来を明るくしてやれるように思うのだが、失敬だとお思いにならなければあなたの手で袴はかまぎ着をさせてやってください」

と源氏は言うのであった。

「私を意地悪な者のようにばかり決めておいでになつて、これまでから私には大事なことを皆隠していらつしやるものでも、私だけがあなたを信頼していることも改めなければならぬ」とこのごろは私思つています。けれども私は小さい姫君のお相手にはなれませんよ。どんなにおかわいいでしよう、その方ね」

と言つて、女王は少し微笑ほほえんだ。夫人は非常に子供好きであつたから、その子を自分がもらつて、その子を自分が抱いて、大事に育ててみたいと思つた。どうしよう、そうは言つたもののここへつれて来たものであろうかと源氏はまた煩悶はんもんした。

源氏が大井の山荘を訪うことは困難であつた。嵯峨さかの御堂みどうの念仏の日を待つてはじめて出かけられるのであつたから、月に二度より逢あひに行く日はないわけである。七夕たなばたよりは短い期間であつても女にとつては苦しい十五日が繰り返されていった。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 松風

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>